

## 論文の和文要旨

論文題目

多言語環境シンガポールにおける日本語教育の試み  
—発達に課題を抱える子どもと親のエンパワーメント—

氏名

重松 香奈 (しげまつ かな)

本研究は、意味や知識は人と現実との相互作用を通して社会的に構築されるという観点から多言語環境児を取り巻く関係性に注目し、エンパワーメントの概念から多言語環境で発達に課題を持つ子どもの日本語教育とその実践のあり方について探究するものである。なお、本稿では多言語環境で複数言語と関わる生活環境に長期滞在し、成長している日本人の子どもを「多言語環境児」と呼んでいる。

シンガポールは4つの公用語をもつ多言語・多文化国家であり、シンガポール国民の7割以上は、二語以上の読み書き能力があるバイリンガル・マルチリンガルという多言語環境の特性を持つ。一方で、このような環境で育つ多言語環境児の言語発達に関連し次のような課題が見られる。一点目は、多言語環境で子育てをする親が抱える不安や葛藤の大きさである。二点目は、多言語環境児たちの言語発達の遅滞に関する鑑別の困難さである。三点目は、発達に課題が見られる多言語環境児を育てる親に対して「一言語環境にするべきである」といった、学術的根拠が不明確な助言がなされているという点である。このような課題から見えてくるのは、日本語を継承したい、複数言語を習得させたい、と考える親たちの意思に対抗する力の存在である。筆者は、このような親たちの意識に対抗する力の存在により、親たちが子どもたちのことばを育てるための行動力を失っているのではないかと考えた。つまり、親たちが主体的な行動をとるためには親たちの不安や葛藤を軽減させるためのエンパワーメントが必要であると考え、本研究の研究設問を以下のように立てた。①多言語環境で子育てをする親を取り巻く抑圧や葛藤とはどのようなものか、②多言語環境で発達に課題を抱える子どもの日本語を育成するための教育実践とはどのようなものか、

第1章では多言語環境で育つ発達に課題をかかえる子どもたちの「ことばの教育」を検討するにあたり、どのような学問領域の知見を基盤として論を進めていくべきか検討

を行った。その結果、本研究では言語教育関連の知見だけではなく、これまで発達障害の研究がなされてきた教育心理学の知見や、多言語環境という社会言語関連の知見など、さまざまな領域の知見を応用して多角的に検討する必要があると考え、言語教育と関連する多領域の知見を応用して多角的に研究をすすめる「応用言語学」を基盤として研究を進めることが有用であると考えた。

第2章では、バイリンガル環境で育つ発達障害児の言語発達を研究対象とした先行研究を概観した。これらの先行研究をまとめた結果、バイリンガル環境で多言語を併用することが発達障害児の言語発達に負の影響を与えるといた検証結果はほとんど見られず、発達障害児であってもバイリンガル環境で育った方が障害の特性である困難さを軽減し、将来的にもメリットが多いといったプラスの効果を示す結果が多数示されていることが明らかとなった。

第3章では、本研究のパラダイムについての説明を行った。批判的意識を覚醒させることで、人々がエンパワーメントすることを目指すアプローチは「批判的アプローチ」と呼ばれており、本研究の文脈においては、親が受け身の立場を取らされていることに気付くことによって批判的意識が生まれその先に対抗する力が生まれると捉えられる。したがって、本研究は批判的アプローチの視点から、エンパワーメントの定義を「自分たちが置かれた状況に気付いて問題を自覚し、自分たちの立場を選び取る力をつけること」と定義した。

第4章から第7章の調査では、多言語環境下で子育てをする親が子どもの複数言語獲得に対しどのような意識をもち、また、親たちの不安や葛藤がどのような要因から発生しているのかを調査した。第4章「シンガポール公立学校に通う子どもを育てる日本人親への意識調査」の結果、子どもに期待する日本語力を大らかに捉えている親は子どもの日本語力を肯定的に評価している傾向が高いが、多くの親は「日本にいる子どもと同程度」の日本語力を期待しており、その理想レベルと現実との乖離が「葛藤」の要因となっていることが示唆された。

第5章では、永住目的でシンガポールに移住した日本人の母親にインタビューを行い、親のビリーフの変容過程や、変容に影響を与えた要因についてTEM（複線径路等至性モデル）を用いて分析を行った。その結果、多言語環境で育つ子どもの言語発達に不安を持った親が「一言語環境にした方がいい」といった助言を受けながらも、言語発達に詳しい医療関係者や教育者、また多言語環境での子育て経験者からの情報など、複数の情報源から方向性を模索していたことが明らかとなった。そして、このような情報を得ることによって、自分の悩みは、自分だけが抱えているものではなく、バイリンガル児を育てる親の多くに共通する悩みであり、多くの親たちが大変な努力をしていることに気付き始めたという。そうした気付きの後、母親は子どもの複数言語を維持するために必要なサポートを行うという行動を起こしている。つまり、本事例では、親が複数言語を肯定的に捉えることによって、親の行動を引き起こしていることが示唆された。

第5章は、永住目的でシンガポールに移住した日本人の母親にインタビューを行い、親のビリーフの変容過程や、変容に影響を与えた要因について分析した。その結果、多言語環境で育つ子どもの言語発達に不安を持った親が「一言語環境にした方がいい」といった助言を受けながらも、言語発達に詳しい医療関係者や教育者、また多言語環境での子育て経験者からの情報など、複数の情報源から方向性を模索していたことが明らかとなった。

第6章と第7章の研究協力者は多言語環境で、発達障害が疑われていたり発達障害と診断を受けたりした子どもを育てる親である。発達に課題を抱える子どもたちの親は、発達に特別な課題を抱えていない子どもの親の意識とどのような違いが見られるのか比較し分析を行った。その結果、シンガポールの多言語環境で育つ発達障害児の多くが日系の教育機関に通っており、親たちは子どもの複数言語獲得に対してあまり意欲的ではないといった意識の特徴が見られた。

第7章は、多言語環境でADHD児を育てる親へのインタビュー調査から、ADHD児の言語発達の過程と親のストレスとの関連性についての検討を行った。その結果、言語の未熟さが、子どものフラストレーションとなってメルトダウンを引き起こす要因となっていたことが示唆された。また、頻発するメルトダウンは親子関係や家族関係に重大な影響を与えていたことも示唆された。

第8章では国際結婚家庭のADHD児へ一年間の実践研究を行った。実践の内容は、日本語のコミュニケーション力の向上を目指したピアノレッスンである。一年間の実践から見えてきたのは、子どもの成長を長期的な視点で捉えることの重要性である。また、子どもの支援や教育は、子どもの親、医療関係者や心理士、学校教員、日本語教師たちなど、子どもの周りにいる関係者たちが、連携・協力し、長期的なまなざしをもって支援していくことの重要性が示唆された。

終章では、これまでの考察を統合し、援助実践としての「エンパワーメントアプローチ」と、当事者自らがエンパワーメントするという「セルフ・エンパワーメント」の二つの側面から実践のあり方を検討した。まず、多言語環境で子育てをする親の【自己実現】とは「不安感なく子どもの複数言語を育てられるような環境の調整を行うこと」であり、親が自らのおかれた状況を認識し、問題に気付くこと、つまり【意識化】することが、親の「セルフ・エンパワーメント」であると考えた。次に、援助実践としての「エンパワーメントアプローチ」の具体的な方法として、次の三点を示した。第一に、エンパワーメントアプローチの実践のスタートとなるのは、親の負担感を理解することと考えた。なぜなら、本研究を通して見えてきたのは、多言語環境児を育てる親たちが、教育的指針となるような情報を求めていたにも関わらず、なかなか求める情報にリーチすることができていない姿や、情報が不足する中で手探りの言語支援を行っている姿であり、このような親の負担感への理解が不足していると考えたためである。

第二に、親が求める情報の提供を行うことがエンパワーメントとして有効に働くと考

えた。第2章で示した先行研究では、発達に課題が見られる子どもであってもバイリンガルになることは可能である、多言語の併用が発達に負の影響を及ぼすことはない、といった知見が多く示されていることから、これらの知見が一般的にも認知されれば、多言語環境で発達に課題を持つ子どもを育てる親たちが安心して母語を使い、複数言語獲得に向けた環境を整備することを後押しする力として作用すると考えたためである。

第三に、あたたかいまなざしをもって長期的な支援を継続することである。本研究では、多言語環境児たちがさまざまな言語発達過程をたどっていることが見えてきた。例えば、幼児期に言語発達に遅れが見られた子どもが、その後、何の問題もなくなったケースや、複数言語のバランスが取れていないように観察された子どもが、長い時間をかけて、そのバランスが改善されたケースなどである。したがって、多言語環境児たちの言語発達過程におけるさまざまな課題に柔軟に対応しながら、長期的な支援を行っていくことが重要であると考えた。以上まで検討から、「多様な言語背景を持つ子どもの日本語を育てるエンパワーメント概念モデル」を次のように提案した。

#### **【多様な言語背景を持つ子どもの日本語を育てるエンパワーメント概念モデル】**

多様な言語背景を持つ子どもの日本語を育成するためには、ミクロレベル（児童生徒、家庭）、メゾレベル（学校・医療機関・日本語教育機関）、マクロレベル（社会・地域）のそれぞれからアプローチを行う必要がある。親にとっての【自己実現】とは、不安感なく、子どもたちのことばの育成を支援する環境を整えるための行動をとることであり、自らのおかれた状況を認識し、問題に気付くこと、つまり意識化することがセルフ・エンパワーメントとなる。関係者は、親の【負担感】を理解した上で、学術的な根拠に基づいた【知識の提供】と【適切な助言】を行うことが必要である。さらに、子どもの言語発達を長期的に捉えた上で長期的な【支援体制】を構築することも求められている。必要とされる情報が相手に伝わることによって【主体的な行動】を引き起こすことが可能となり、親は、日本語を育てるための【環境調整】を行うことができる。こうして、多様な言語背景を持つ子どもの日本語を育成することができる。